剣士教育学校

小説

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣士教育学校

【Ｎコード】
Ｎ９２３７Ｘ

【作者名】
小説

【あらすじ】
とある少年が剣を使っていろいろする話。最初から強いです。

1（前書き）

頑張ろう。

1

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは剣士教育学校です。
ここで剣の実力を磨き日本一の剣士となってもらいます。
この学校は安全面においてとても優れております。
テストなどはなく、授業で得られるポイントで順位を出します。
2年生からはいじめなどが起こらぬよう一年生の時の成績が均等になるようクラス分けをします。
なので安心してお子様をあずけることができます。
それでは学園生活をお楽しみください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

入学式

「久しぶり～。」
「お前もこの学校来てたんだ。」
「絶対日本一になってやる。」
「がんばろーね！！」
などの様々な声がする。

そこに一人誰にも気づかれぬほど静かに、そして素早く教室に向かう男がいた。
彼の名前は「影崎　迅」（かげさき　しゅん）。
クラスは1組。
容姿は中の上から、上の下といったところ。

普通の少年と変わらないように見えるが、後に剣の神様として崇められるようになる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

朝会

「憂鬱だ。」
少年は何が憂鬱かというとこれからの自己紹介。
人見知りで会話なんてあまりしたことのない彼には難しいことだった。

「では出席番号４番、影崎君よろしくお願いします。」
「は、はい。」
（やばい。何話そうとしてたんだっけ？そうだ、前の人の真似にしよう。）
「影崎　迅です。趣味はえっと、読書です。よろしくお願いします。」
ふぅ。なんとか乗り切った。
「では次は出席番号５番・・・」

トントン
？
なんだ。
（出席番号９番の真嶋賢治さんだ。どうしたんだろう？）
「ど、どうしたんですか？」
「いや、席が隣だったから声かけたんだ。よろしくな。」
「こちらこそ、よ、よろしくお願いします。」
（よかった。いい人そうな人が隣で。）
「ところでさ。」

「なんですか？」
「あの先生可愛くね？聞いた話によると独身らしいよ。」
「そうなんだ・・・。」
（誰に聞いたんだろう？）
「それでさ・・・」
「賢治！！」
「おっと、なんだ？」
「私の自己紹介ぐらいきちんと聞け！！」
「奈美はあいかわらずうるせえな。」
「なんだと？」
「もうちょっと女らしくしろっての。」
「賢治。殺す。」
うわ。こっち来た。何か後ろに鬼のようなものが。
「久我奈美さん。朝会の最中ですので席にお戻りください。」
「チッ！！」
こわっ。女の子が絶対出しちゃいけない声出したよ。
「あの人なんなの？」
「あぁ、あれは久我奈美つって俺と同じ学校に行ってたんだ。ちなみに俺の幼馴染だ。」
「仲悪いの？」
「あぁ。はっきり言って週に２０回ぐらい喧嘩してる。」
「すごいね。」
「影崎。なんか口調が敬語じゃなくなってきたな？」
「うん。実際はこんな感じでしゃべるんだけど、さっきは緊張してて。」
「まぁ、緊張がほぐれたようで良かったよ。」
「ありがとう。」
「影崎は「迅でいいよ。」分かった。迅は中学どこに通ってたんだ？」
「僕は中学は行ってないよ。」

「なんでだ？」
「いろいろあってね。」
「そうか、悪かったな。気にしてること聞いちまって。」
「いや、別に気にしてないよ。」
「そうか？それならよかった。」
「こっちも真嶋君と話せてよかったよ。はじめての友達だ。」
「そうかそれは良かった。あ、俺のことも賢治でいいよ。敬語は苦手だからやめてくれ。ってもしかして小学校も行ってないのかよ。」
「うん。だから話しかけてもらえてよかった。人見知りだから絶対話しかけるなんて無理だもん。」
「そうか。まぁこれからよろしくな。」
「よろしく賢治。」

ついに彼らの学園生活が始まった。

1（後書き）

頑張った。

2（前書き）

頑張るぞ！

2

朝会終了

「賢治！！おい賢治！！」
「賢治賢治うるせぇなお前は。」
「なんだと。もう一回言ってみろ。」
「賢治賢治うるせぇなお前は。」
「バカにしてるのかお前は。」
「もう一回言ってみろって言ったのはお前だろ。あとバカにしている。」
「このっ…。表に出ろ。」
（どうしよう。止めるべきかな？）
「ねえ。」
でも怖いし。
「ねえってば。」
殴り合いとかになったら困るし。
「おーい。」
ん？なんだ？って女子に話しかけられてる。ここは冷静に行こう。
「どうしたの？」
「やっと気づいてくれたね。」
「もしかして何度も呼びかけてた？」
「うん。でも全然気づかないんだもん。」
やっぱりか。
「ごめんっ。考え事してるとつい周り音が聞こえなくなって…。」
「ふぅん。まあいいや。君もしかしてあの二人のこと止めようとしてる？」
「ううん。怖いから止めるか止めないか迷ってる。」
「止めなくても大丈夫だよ。」

「なんで？」
「えっとね、あの二人いつも喧嘩してるけど本当は仲が良いみたいで絶対に殴り合いとかは起こらないから。それにいちいち止めてたら身がもたないよ。一日に１０回ぐらい喧嘩してるんだから。」
「そんなに！？週に２０回ぐらいって聞いてたのに。」
「そんなわけないじゃん。クラスが違っても一日5回は喧嘩してたのに。」
「そうだったんだ…。ずっと気になってたんだけど君の名前は？」
「自己紹介がまだだったね、ってさっき朝会ではなしたじゃん。」
「ごめん。賢治君と話してて聞いてなかったんだ。」
「まぁ賢治は無駄話ばっかりしてるからね。僕の名前は沢下水香（さわしたみずか）。賢治達とは同じ学校だったんだ。水樹って呼んでいいからね。よろしく。」
「僕の名前は影崎　迅。迅って呼んでね。」
「うん。よろしく迅君。敬語じゃなくてもいいからね？」
「わかった。よろしくね水香さん。」
もう二人も友達ができちゃった。幸先いいなぁ。
「そろそろ喧嘩も終わる頃だよ。」
「なんでわかるの？」
「二人をよく見てみ。もうクタクタになってるよ。いっつも体力が切れるまで口喧嘩を続けるんだ。」
「大変だね…。」
「うん。まぁ前の学校では名物みたいなものになってたけどね。」
「はは…。」
「くじけずこれからこのクラスで一緒に頑張ろう。」
「そうだね。うん。頑張ろう。」
「おっと授業の時間だよ。席に戻ろう。」
「うん。ちょうど良く喧嘩が終わってよかったよ。」
「そうだね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ぜぇぜぇ。」
「賢治。大丈夫？」
「もう無理。少し休みたい。」
「でも授業はじまっちゃったから頑張ろう。」
「おう。」

「この学校でのはじめての授業は、木を切ってもらいます。」
「「「「「「「木？」」」」」」」
「はい。太さや硬さ、切り口の滑らかさなどでポイントをつけます。最高点は20点です。なお一年生の間に1000点以上ポイントを貯めると、珍しい武器とギルドランクCが与えられます。制限時間は2時間。10分後にスタートです。頑張ってください。」
「ギルドランクCだってさ。」
「スゲーな。」
「珍しい武器ってなんだ？」
「絶対20点とってやる。」

「賢治。ギルドってなんだ？」
「迅はギルドも知らないのかよ。ギルドっつーのは国のためになるようなことや依頼人からの依頼、モンスターの討伐なんかをするところだ。ギルドランクっていうのはそのランクに応じてそれ相応の依頼を受けられるようになるんだ。」
「そうなんだ。」
「ついでに教えるけどギルドランクはEランクが一番下でDランクがその一つ上、そしてC、B、A、Sと続くんだ。でも王家の依頼や、ずっと成功できなかった依頼、などをクリアすると国から勲章がもらえて特別な二つ名がもらえるんだ。」

「そうなんだ。じゃあ…。」
「どうしたんだ？」
「いや、なんでもないよ。そういえば二つ名をもらった人にはどんな人がいるの？」
「例えば龍槌のヒロとか鉄閃の夜澄美（よすみ）とかかな。表に出ない人が多いからあんまり知らないんだ。」
「なんで賢治は知ってるの？」
「親が清月（きよつき）財閥と関わりがあるんだ。」
「清月財閥？」
「まあ、大きい会社の社長みたいなものだよ。」
「そうなんだ。すごいね。」
「しかしギルドも知らないなんてどこに住んでたんだよ。国中の誰でも知ってるようなところだぞ。」
「いや～小さい頃から森の中に住んでてね。」
「なんで森なんかに？」
「そこで…やっぱり言えない。」
（修行してたなんて、変な奴と思われちゃう。）

「ではスタートです。」

「その話は気になるけど始まっちゃったから木、切りに行こう。」
「うん。そうだね。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊

「ここらへんで切ろう。」
「よっしゃ。頑張んぞ。あ。あれなんて太くていいんじゃないか？」
「すごい太いね。切れるの？」
「切れるはず。この木よりは小さいけど木は毎日の剣の練習の木と

して毎日切ってる。」
「すごいね。がんばれ。」
（なんでそんな大きい木が毎日切れるんだろう。すぐになくなっちゃいそうだけど…）
「いくぞ。」

ブゥンッ！！

キーン！！

「痛ぇ。」
「大丈夫？」
「ああ、なんとか。すげぇ硬かった。多分この木はファジアの木だ。」
「ファジアの木？」
「日本で二番目に硬い木だ。小枝を折るのにも苦労するぞ。」
「大変だな。じゃあ次は俺の番か。」
「いやだから、その木は無理だって。」
「まあ見ててよ。」

春の型　一式　光迅（こうしゅん）

スッ…

チャキッ

「今何したの？木倒れてないよ。」

「いや、切れてるよ。木の上らへん蹴ってみて。」
「こうか？」

ドンッ

ドォォォォン！！

「スゲー！！倒れた。え。うそ。なんで？」
「落ち着けって。今のは春に木の間から差し込む光のように早く切る技だよ。」
「スゲェな。」
「ありがとう。俺ちょっとこの木先生に出してくるね。」
「一人称俺になってるよ？」
「やっぱり技使うと緊張がなくなる。」
「不思議だな。迅は。」
「まあこれが自然体なんだよ。」
「そうなんだ。面白いな。」

「おーい今の音なんの音？」
何か聞こえるな。
「水香が呼んでるぞ。」
「すこし話してくる。」
「おう。俺もいい点数もらえるよう頑張るわ。」
「頑張れ。」

少年は声のした方にかけていった。

2（後書き）

頑張った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9237x/

剣士教育学校

2011年10月26日21時09分発行